

## 矛盾に充ち満ちた菅野論文「『科学の中立説』に対する誤解」

京都支部 宗川吉汪

本誌7月号に掲載された「菅野論文」(菅野礼司「『科学の中立説』に対する誤解」2017年7月号、p.32～37)の論理は矛盾に充ちている。まず第1に、著者は「科学の価値中立」を主張しながら「科学の理論的価値」を認める。第2に、「価値中立」と「没価値」は同義の学術用語であるにもかかわらず勝手に無視して、科学理論は「価値中立」(=「没価値」)ではあるが「没価値」(=「価値中立」)ではない、などと訳の分からないことを口走る。そして第3に、技術は「価値中立」でないが「両刃の剣」(=「価値中立」)である、という。これほど矛盾した論文も珍しい。以下、著者の論述にそって少し詳しく見ていこう。

### 矛盾する著者の主張

論文には、「科学理論は善用しやすい悪用しやすいという特性をもたないという意味で価値中立である」(p.33 右欄上から9～11行目)、「科学的事実(自然法則、自然の仕組み)には善悪はなく、それ自体は価値中立である」(p.37 左欄上から11～13行目)とある。これらの文言は極めて一般的・常識的な「科学の価値中立」に関する言い回しである。つまり、科学は善悪という「価値判断」の埒外にある、というわけである。

ところが、著者は、「『価値中立』は、科学の理論と利用について、価値と価値判断を一切排除するものでない」(p.33 左欄下から12～10行目)と述べる。そしてこれが、本論文の主要な主張点である。しかしながらこの主張は、上でみた一般的な「科学の価値中立」とは矛盾し、むしろ、「科学的『真理』をも価値評価の対象にしなければならない」という私の「科学価値中立説擁護論批判」に通じる(JJS、2016年12月号、p.32～37)。

### 矛盾の第1の原因

なぜこのような矛盾が生じるのか。その第一の原因は、「主観的な価値ではなく、科学のような客観的に評価できる価値に議論を限定」すべき、という著者の主張に由来する(p.32 右欄下から1行目～p.33 左欄上から1行目)。ここで主観的価値と客観的価値とが峻別され、「真善美に価値を認めるように、科学知はそれ自体価値を有する」と主張される(p.33 右欄上から3～4行目)。「真善美」を客観的価値(絶対価値)とする著者の見方は、これまで幾度も人口に膾炙され、古き良き時代の郷愁を誘うものであるが、今日の知識人としてはあまりにナイーブではないだろうか。

もともと「価値」とは、ある判断(価値判断)の結果である。価値判断は価値評価に関連するところから、基本的に評価主体の主観に依存する。そこで、私は「価値の評価では、対象(もの・こと)と評価する人間主体(個人が基本)との関係が問題となる。最終的な価値判断は、人間主体と対象の相互の性質の複雑な絡み合いの結果である」とした(JJS、2016年12月号、p.32)。著者のいう「客観的価値」の判断主体は一体「何者」か。それは、人か神か?

「客観的価値」とは、個人の尊厳、民主主義など多くの人が共有している思想に関する評価をあらわす。「核兵器は絶対悪」という主張も「客観的価値」の範疇である。JSAは、「原発ゼロ」をなんとか「客観的価値」にまで高めたいと日夜奮闘しているところである。

科学の発達が近代思想の形成や技術の進歩に役立ったことを取り上げて、「科学には客観的価値

値がある」との表明はあまりに常識的に過ぎるだろう。「科学の価値中立」で問題にしていることは、そんなことではなく、事実認識と価値評価の問題であったのだ。

## 矛盾の第2の原因

著者の矛盾の原因の第二は、論文第2節の「『没価値』と『科学価値中立』とは別である」という著者の特異な解釈である（p.33 右欄上から2行目～）。これが私の主張（「価値自由」、「価値中立」、「没価値」は同義で、価値評価しないこと、できないこと、してはならないことを意味する）（JJS、2016年12月号、p.32～37）に対する筆者の必死な反論の中核である。しかし残念ながら、著者の主張は的外れである。以下、辞典の解説をみてみよう。

『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』では〈価値自由 かりじゆう Wertfreiheit〉は以下のように説明されている。「社会科学において認識の客観性を保つためには、一定の価値基準に従って善悪、正邪の判断を迫るような態度をとるべきでないという M.ウェーバーの主張。—中略— 没価値性あるいは価値中立性ともいわれる —後略—」

『大辞林 第三版』では〈かりじゆう【価値自由】〉は、「マックス＝ウェーバーの学問論の立場。経験科学は価値判断に立ち入ってはならないとする。実証主義をめぐる今日の論争において、しばしば批判される。没価値性」と説明されている。

また、北村実「科学の価値中立性と科学者の社会的責任」（JJS、2014年4月号、p.32～37）にも「科学の研究にあって、価値中立は鉄則である。とはいえ、科学者が研究の所産に対して没価値的・価値中立的に振る舞うことは許されない」とある。（ゴシックは宗川）さらに、鯉坂真「科学者の責任と価値判断の問題」（季論21、2013年春号、p.17～29）でも「価値中立」と「没価値」とは同義に取り扱われている。

上に挙げた辞書や論文では「没価値」は哲学・社会科学上の学術用語として使用されている。「没」の意味を、もし、『広辞苑 第六版』にあるように「(接頭語的に) 無いこと。『没交渉・没常識・没理想』」とすれば、「没価値」は、さしずめ「価値の無いこと」になる。著者は「没価値」を一般用語とみなしてしまったのだ。だから「科学理論は『価値中立』(＝没価値)ではあるが『没価値』(＝価値中立)ではない」(p.34 右欄上から2～3行目)などと訳の分からないことになってしまう。筆者は、ひたすら、“科学理論には価値がないわけではない、それを認めない宗川はケシカラン”と叫んでいるのである。

学術用語と一般用語の解離は学問の世界では普通にあることだ。ましてや日本語への翻訳でさらに解離する例はいくらでもある。一例を挙げれば、生物学の「進化」の英語は *revolution* で、「展開」が原義である。一般用語としての「進化」は、日本語では、進歩・発展を意味するが、現代生物学では、「進化」は、「時間経過に伴う、生物集団中の遺伝子頻度の変化」と定義される（『生物学事典』、東京化学同人、2010）。日本語の「科学」も、もともと *scientia*（知を愛する）ではなかったか。

## 矛盾する「価値中立」

著者は、また、「科学と技術は目的も性格も異なるゆえに区別すべき」と主張する（p.33 左欄上から13～14行目）。そして、「価値中立説は科学知として『理論的価値』の存在を否定するわけではない。そして技術を通してその利用価値については両刃の剣というのである。」（p.34 左欄下から2行目～右欄上から2行目）、「ほとんどの技術は利用目的が決まっているから、『利用価値』に関して価値中立でない」（p.34 右欄下から13～12行目）、「科学の技術利用における善悪か悪用の判断は、科学理論そのものによってなされるのではなく、—中略—人間（科学

者を含む)が行うものである」(p.33 右欄上から11~14行目)などと主張する。

著者の上の主張をつづめて解釈すれば、“科学には「理論的価値」はあるが、善悪の価値はなく、一方、技術には「利用価値」があるため、善悪の価値が発生する”ということになる。ここで著者は、「利用価値の判断」は人が行うことを認めている。では、「理論的価値の判断」は誰がするのか。再び、神か人か、が問われることになった。

「両刃の剣」は、通常、価値中立の代名詞である。これまでみてきたように、著者の主張は、“科学は、技術を通して利用価値（これは、価値中立ではない）が生じるが、その利用価値は両刃の剣（これは、価値中立である）になる”と読み取れる。これは矛盾だ！

著者には、価値に「プラス価値」と「マイナス価値」が存在することが理解できていないようだ。まして、価値判断に階級性のあることも理解できないようだ。

### 罵詈雑言のオンパレード

本論文には、私の名（宗川氏、あるいは氏）がわずか6ページに数えただけでも24回も登場する。加えて私に対する節度を欠いた罵詈雑言のオンパレードだ。例を挙げよう。p.32左欄下から6~5行：回答もせず無視して／p.33右欄上から1行：誤りを犯している／p.35左欄下から7行目：的外れ／p.35左欄下から3行目：思い込み／p.35右欄下から18行目：筋違い／p.34左欄下から16行目：甚だしい独断と偏見／p.36右欄上から15~16行目：的外れ／p.36右欄上から17行目：思い込みによる飛躍／p.37左欄上から1行目：何を主張したいのか／p.37右欄上から11行目：誤解と偏見により独断的に私見／p.37右欄上から14行目：結論ありき／p.37右欄上から15~16行目：都合のよい部分を引くだけ／p.37右欄上から20行目：権威主義、など。ざっとみただけでもこれだけある。そっくり著者にお返ししたい。

しかし何はともあれ、このような論文を掲載したJJS編集委員会の見識は厳しく問われなければならない。

なお、本稿は、「京都支部ニュース 8月号」への寄稿文を一部改変したものである。

2017年9月23日